

ひと息、ひと祈り

金公園と金神社に添えるひとときの提案

橋本雅好研究室 設計：大崎詩心

1. 柳ヶ瀬という場所

岐阜市・柳ヶ瀬は、戦後から高度経済成長期にかけて中部地方有数の繁華街として発展してきたエリアである。映画館、百貨店、飲食街が集積し、「歩いて楽しむ都市空間」として独自の賑わいを形成してきた。一方で、モータリゼーションの進行や郊外化により人の流れが変化し、現在では空き店舗や用途の断片化が進んでいる。しかし柳ヶ瀬は単なる衰退地区ではなく、都市の記憶が濃密に積層した場所であり、近年は再生に向けた小規模な活動や文化的拠点の芽も見られる。今回の敷地である金公園周辺は、そうした柳ヶ瀬の「日常」と「非日常」、「過去」と「これから」が交差する結節点に位置している。

・金公園・金神社周辺の意味

金公園は柳ヶ瀬の中心部にありながら、商業の喧騒から一歩引いた都市の余白として機能している。イベント時には人が集まる一方、平常時は地域住民や通行者が無意識に滞留する、緩やかな公共空間である。隣接する金神社は、岐阜という地名の由来とも関わる「金(こがね)」の信仰を担う場所であり、都市の発展以前から存在する精神的・歴史的な拠り所である。繁華街の只中に神社が残っていること自体が、柳ヶ瀬という場所が持つ「時間の重なり」を象徴している。

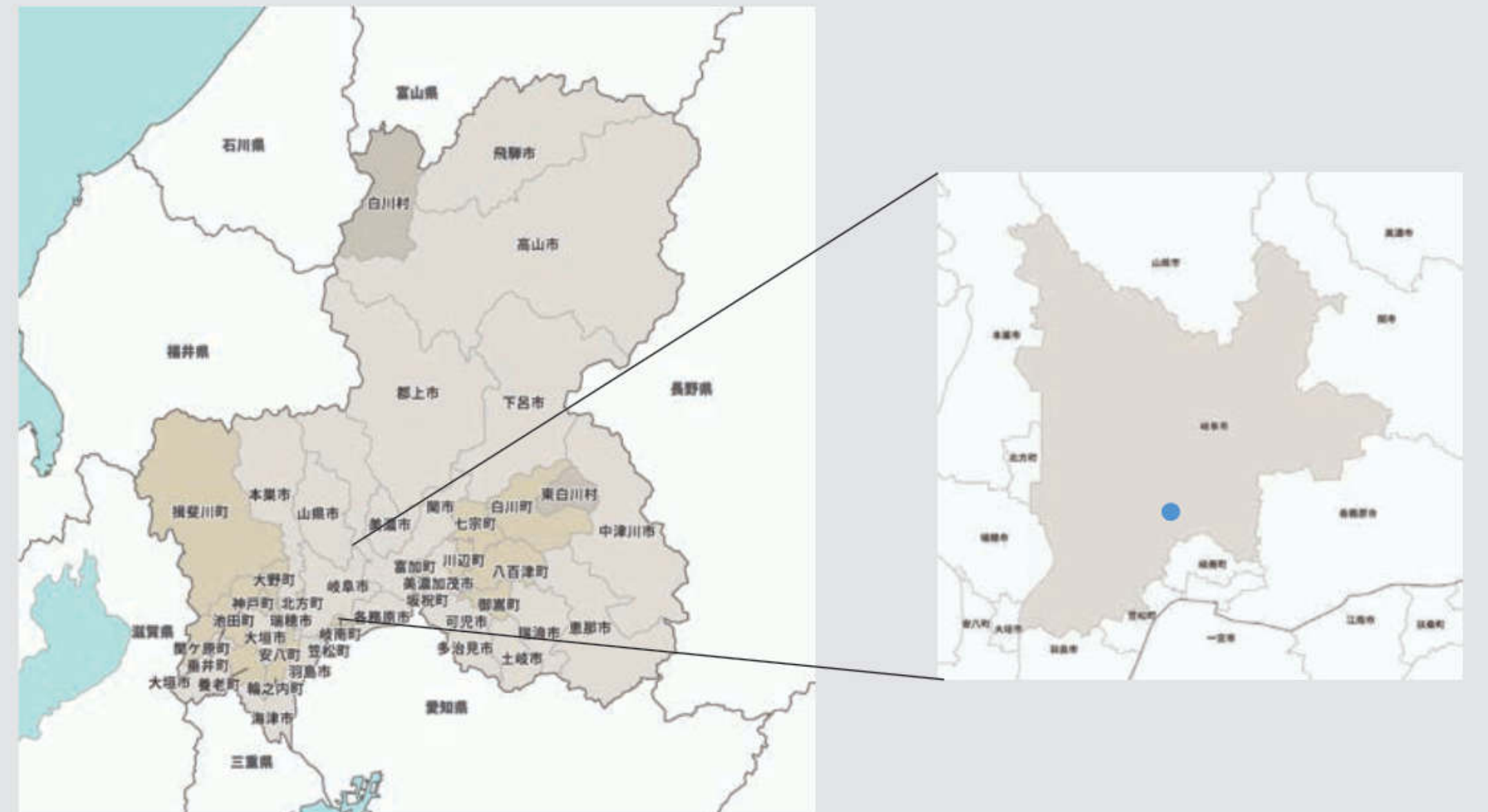
この敷地は、

- ・商業(柳ヶ瀬)
- ・公共(公園)
- ・信仰(神社)

という異なるレイヤーが極めて近接して存在しており、建築がそれらをつなぐ媒介となる可能性を持つ場所である。

・川と柳ヶ瀬の関係性

岐阜の都市構造を考える上で、長良川をはじめとする「川」は欠かせない要素である。柳ヶ瀬自体は長良川沿いではないものの、かつては周辺に小河川や水路が張り巡らされ、物流・生活・景観の基盤となっていた。現在、それらの多くは暗渠化され、都市の表層から姿を消している。しかし、地形や街路の微妙なうねり、敷地割りの名残には、かつての水の流れの痕跡が今も潜んでいる。柳ヶ瀬は「川から切り離された都市」ではなく、水の記憶を内包したまま成長してきた街と捉えることができる。曲線的・連続的な形態は、柳ヶ瀬を行き交う人々をせき止めるのではなく、緩やかに受け入れ、流し、滞留させる空間を生み出す。これは金公園の開放性や、金神社の持つ静かな重心とも呼応する。かつて地中に隠された水の流れを、建築の形として地上に「再出現」させることで、見えなくなった都市の基層を現代に読み替える建築として位置付けることができる。



5. 各行事・イベント金神社の祭事は、年に数回の「点」として発生し、特定の時期にのみ人が集まる。一方、サンデービルギングマーケットは月に一度定期的に開催され、「線」のように都市の日常へにぎわいを流し込ん

5-1. サンデービルギングマーケットと周辺の動き
柳ヶ瀬商店街周辺では、月に一度開催されるサンデービルギングマーケットをはじめとしたイベントにより、一時的に大きな人の流れが生まれる。金公園周辺もその動線の一部となり、普段とは異なるにぎわいが立ち現れる。

毎月 第3日曜日
柳ヶ瀬商店街一帯で開催されるマーケットイベント。手仕事・クラフト・古着・雑貨・飲食など、作り手が直接出店するライフスタイルマーケット。



冬～春（1～5月）
新生活や春の装いを意識したクラフト・アパレル、焼き菓子やコーヒーなどの飲食出店が多く、回遊性が高い時期。



初夏（6月）
金公園周辺まで会場が広がり、屋外での飲食・滞在が増える。マルシェ的なにぎわいが強まる。



夏（7～8月）
暑さ対策を意識した開催。夕方までの短時間滞在型、冷たい飲食や軽食中心の構成。



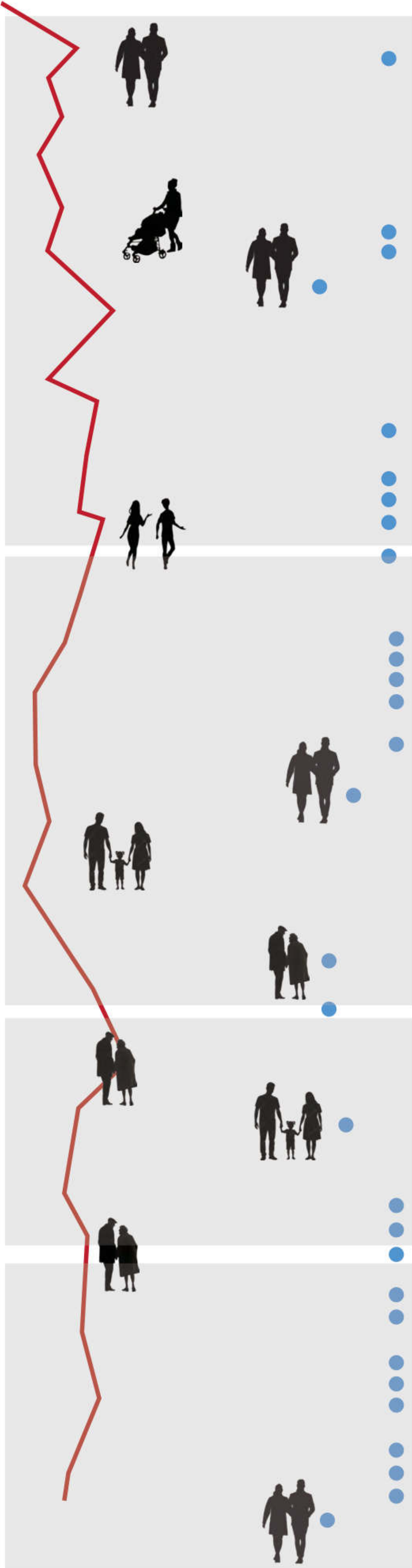
秋（9～10月）
出店数・来場者ともに多い時期。手仕事・古道具・アート系の出店が充実し、柳ヶ瀬全体のにぎわいが強くなる。



冬（11～12月）
規模はやや落ち着くが、常連客や地域住民の交流の場としての性格が強まる。



来場者は名鉄岐阜駅・JR岐阜駅方面から柳ヶ瀬へと歩き、商店街を回遊しながら金公園へと流れ込む。公園内では出店や休憩スペースを求めて滞留が生まれ、芝生やウッドデッキ、ひな壇状のベンチが自然な居場所として機能している。さらに金神社方面へと足を伸ばす人の姿も見られ、商店街—公園—神社が一体となった広がりのある回遊動線が形成される。イベント時には、日常では分断されがちな空間同士がゆるやかにつながり、都市の中に一時的な“面”としてのにぎわいが出現している。このように、点化する場所がイベントによって線で結ばれ、さらには面へと拡張していく。この一時的に生まれる回遊と滞留の関係性を、日常へとどう引き延ばせるかが本計画の重要な視点である。



5-2. 金神社では年間を通して様々な祭事が行われ、地域の節目や願いを受け止める場として機能してきた。一方で、行事は特定の時期に集中し、平常時の祈りは日常の都市活動と切り離されがちである。本研究では、こうした祭事を都市の時間軸の中で捉え直し、日常と祈りが重なり合う空間のあり方を考える。

1月/1日 午前 零時 初御饗祭
午前7時 元旦祭【中祭】



3日 午前9時 元始祭
6日 午後3時 末社秋葉神社火災防護祈願祭
14日 午前9時 左義長神事・随時災難消除祈禱



20日 午後2時 末社金高椅神社新年祭

2月/3日 午前9時 節分祭・随時節分特別祈禱
11日 午前10時 紀元祭【中祭】
17日 午前10時 祈年祭【大祭】

3月/3日 午前10時 末社玉姫神社例祭
旧初午 午前11時 末社金祥稲荷神社春季大祭

4月/第一土曜日 午前10時半 神幸祭（稚児行列受付）
4日 午後3時 前日祭
5日 午前10時 例大祭【大祭】
29日 午前10時 昭和祭【中祭】

5月/15日 午前11時 末社秋葉神社春季大祭
境内の「なんじゃもんじゃ」が見頃です。

6月/1日 午後1時30分 写真焼納祭



30日 午後4時 大祓式

8月/9日 午前9時 夏越祭・茅の輪神事



15日 午後6時半 献燈祭

9月/15日 午前11時 末社秋葉神社秋季大祭
20日 午後2時 末社金高椅神社秋季大祭
第三土曜日 午後3時 末社黒岩神社例祭 28年17日

10月/17日 午前10時 末社神明神社例祭
28日 午前10時 末社物部神社・賀夫良城社例祭

11月/8日 午前11時 末社金祥稲荷神社秋季大祭
23日 午前10時 新嘗祭並大麻神符頒布始奉告祭【大祭】
23日 境内にて「こがねさんの秋まつり」

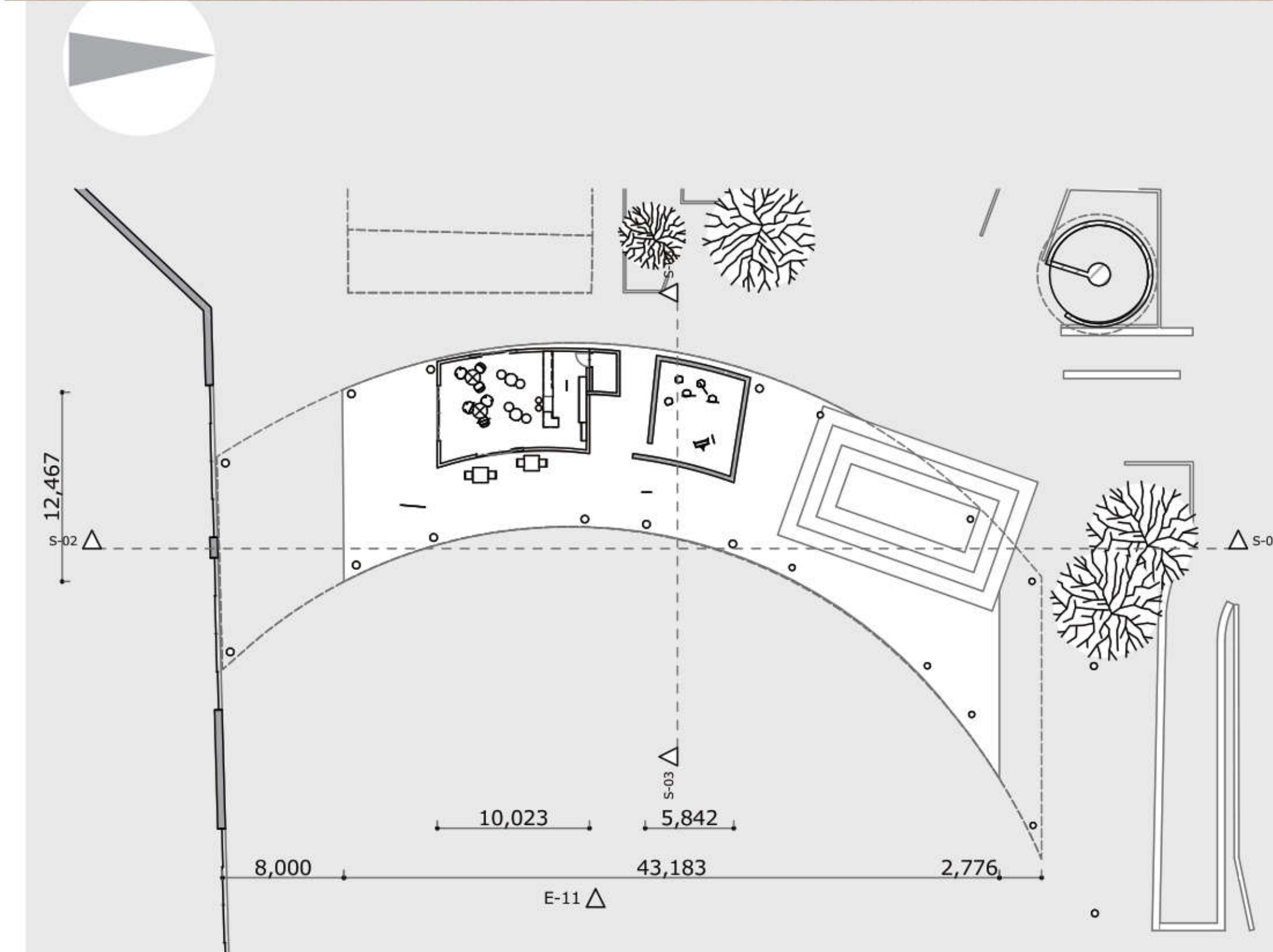
12月/10日 午前10時 末社猿田彦神社例祭
23日 午前10時 天長祭【中祭】
31日 午後4時 大祓式

金公園と金神社は、柳ヶ瀬という同じ都市の文脈の中にあり、物理的にも近接した関係にある。しかし両者は、それぞれ異なる時間の流れと行為を受け止める場として存在しており、十分に連続した体験として結びついているとは言い難い。

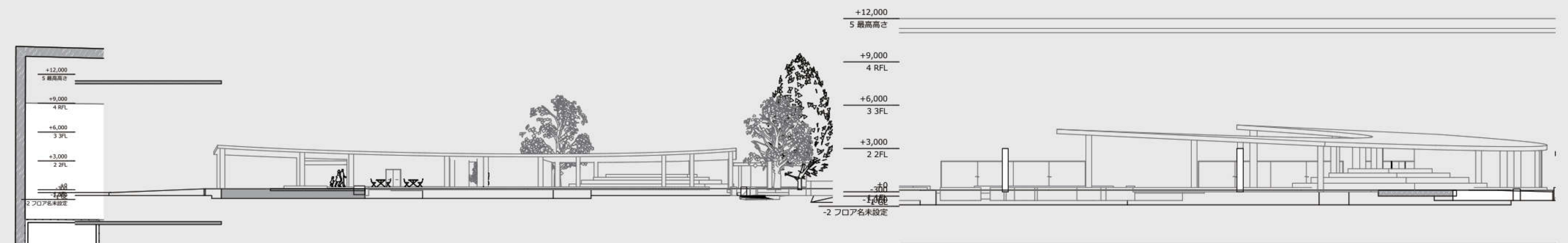
金公園は、散歩や遊び、待ち合わせ、イベントなど、日常的で動きのある行為を受け止める「開かれた場」として機能している。一方、金神社は、初詣や節分、例祭といった特定の時期に人が集まり、願いを託す「祈りの場」としての性質が強く、平常時には比較的静かな時間が流れている。

この二つの場は、日常と非日常、動と静という対照的な性質をもちながらも、都市の中で明確に分断されている。公園で生まれるにぎわいや人の流れは神社へと十分に引き込まれず、神社に蓄積された記憶や祈りの時間も、都市の日常へと開かれにくい状況にある。サンデービルギングマーケットなどのイベントによって一時的に人の流れが生まれるものの、それらは断片的な出来事に留まり、日常と祈りを持続的につなぐ仕組みにはなっていない。この敷地では、行事やイベ



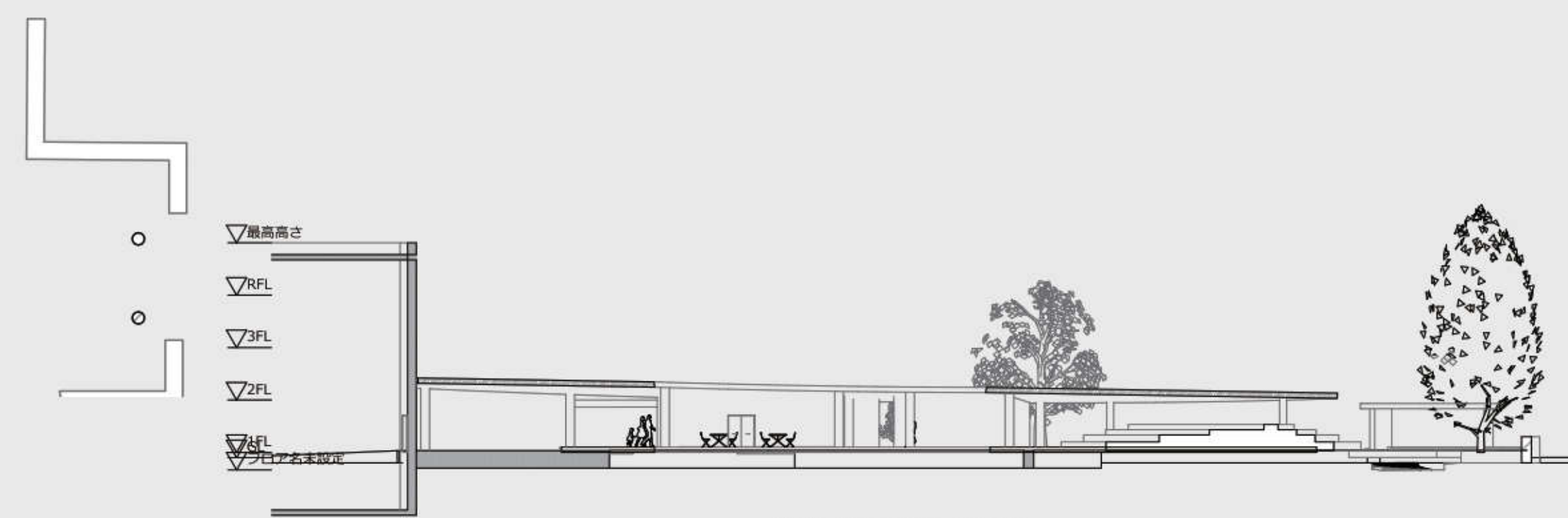


公園側平面図 1 / 200

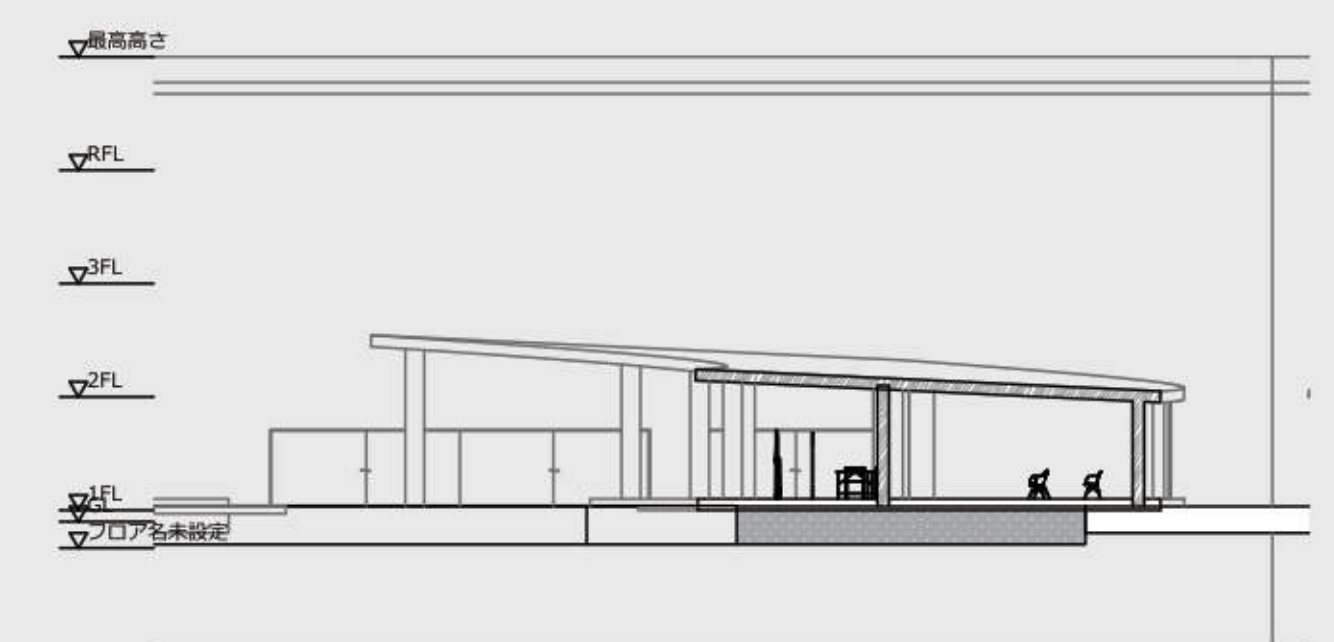


E-11 立面図正面 1 / 300

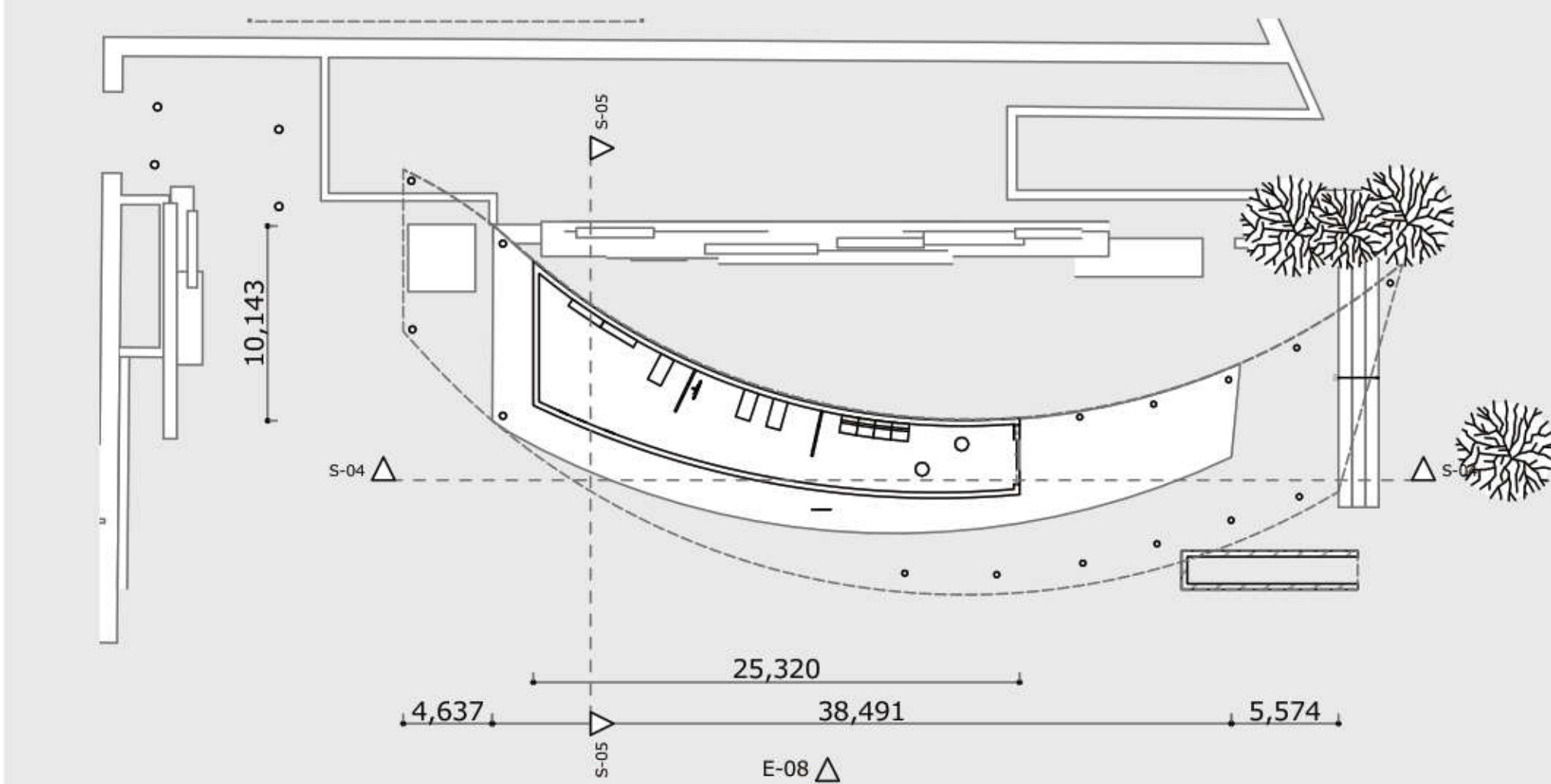
北側立面図 1 / 300



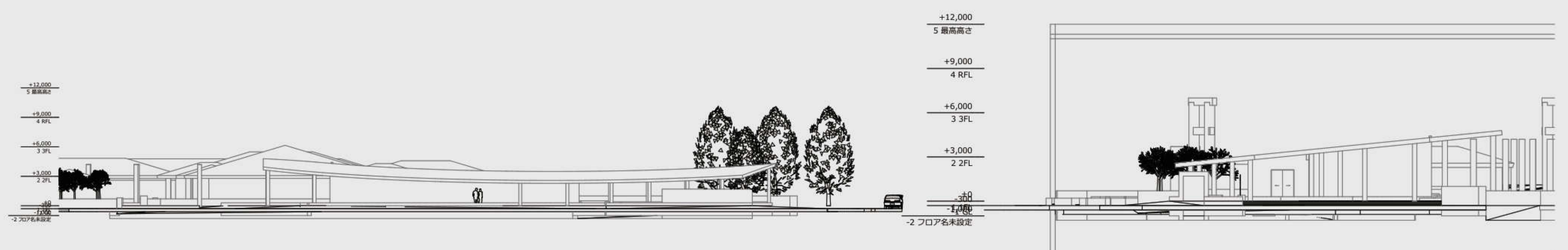
S-02 断面図 1 / 300



S-03 断面図 1/300

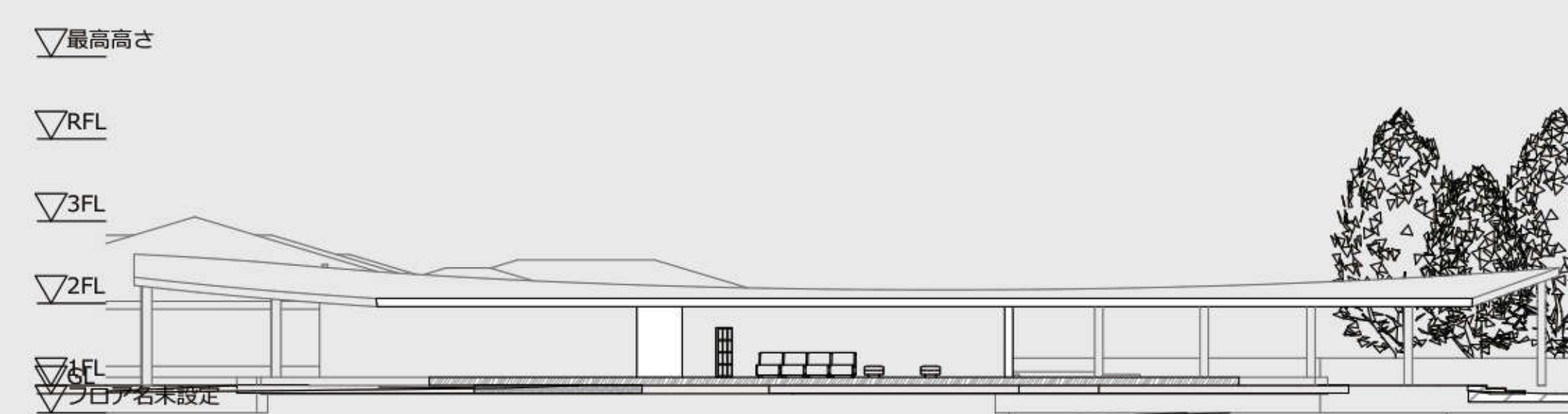


多目的広場（神社前）平面図 1 / 200

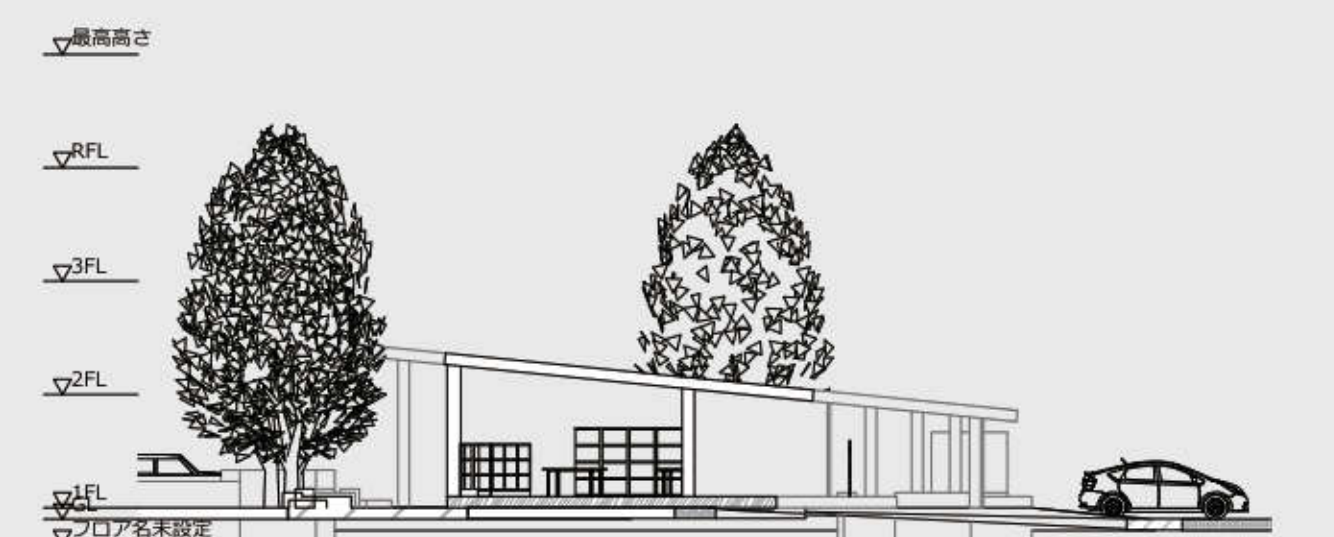


E-08 正面立面図 1 / 300

北側立面図 1 / 300



S-04 断面図 1 / 300



S-05 断面図 1 / 300

3. 問題意識
現代の都市において、「祈り」という行為は日常生活から切り離され、初詣や祭事などの特別な機会にのみ行われる、非日常的な行為となりつつある。一方で、公園は散歩や休憩、遊びといった日常的な行為を受け止める「ひと息の場」として機能しているが、歴史や祈りといった時間の文脈との関係は弱く、都市の中でそれらが交わる機会は限られている。

本来、都市には日常と非日常、動と静、現在と記憶が重なり合う余地があるはずである。しかし現在の都市空間では、それぞれが明確に分断され、祈りは閉じた場所に、日常は消費的な場へと整理されてしまっている。そこで本研究では、「ひと息」と「ひと祈り」を地続きの体験として捉え直し、日常の延長線上で自然に祈りに触れられる都市空間を構築することで、都市に開かれた祈りの背景を再編集できないかと考えた。

4. 現地調査
金公園は、犬の散歩や親子の遊び、立ち話など、日常の中に自然と取り込まれている「開かれた場」である。近年はベンチや遊具の整備、マルシェやイベントの開催によって、平坦だった公園空間が多様な使われ方へと更新されつつある。一方で、居場所は点在しており、滞在の仕方や動線には連続性が生まれにくい現状が見られた。金神社は、地域に根付いた祈りの場として、主に年配層による日常的な参拝や、行事・節目の際に利用されている。都市の中心にありながら、境内に足を踏み入れると時間の流れが切り替わるような静けさが保たれている。その一方で、若い世代の利用は少なく、日常の動線からはやや切り離された存在となっている。

◎敷地調査 | 金公園・金神社周辺

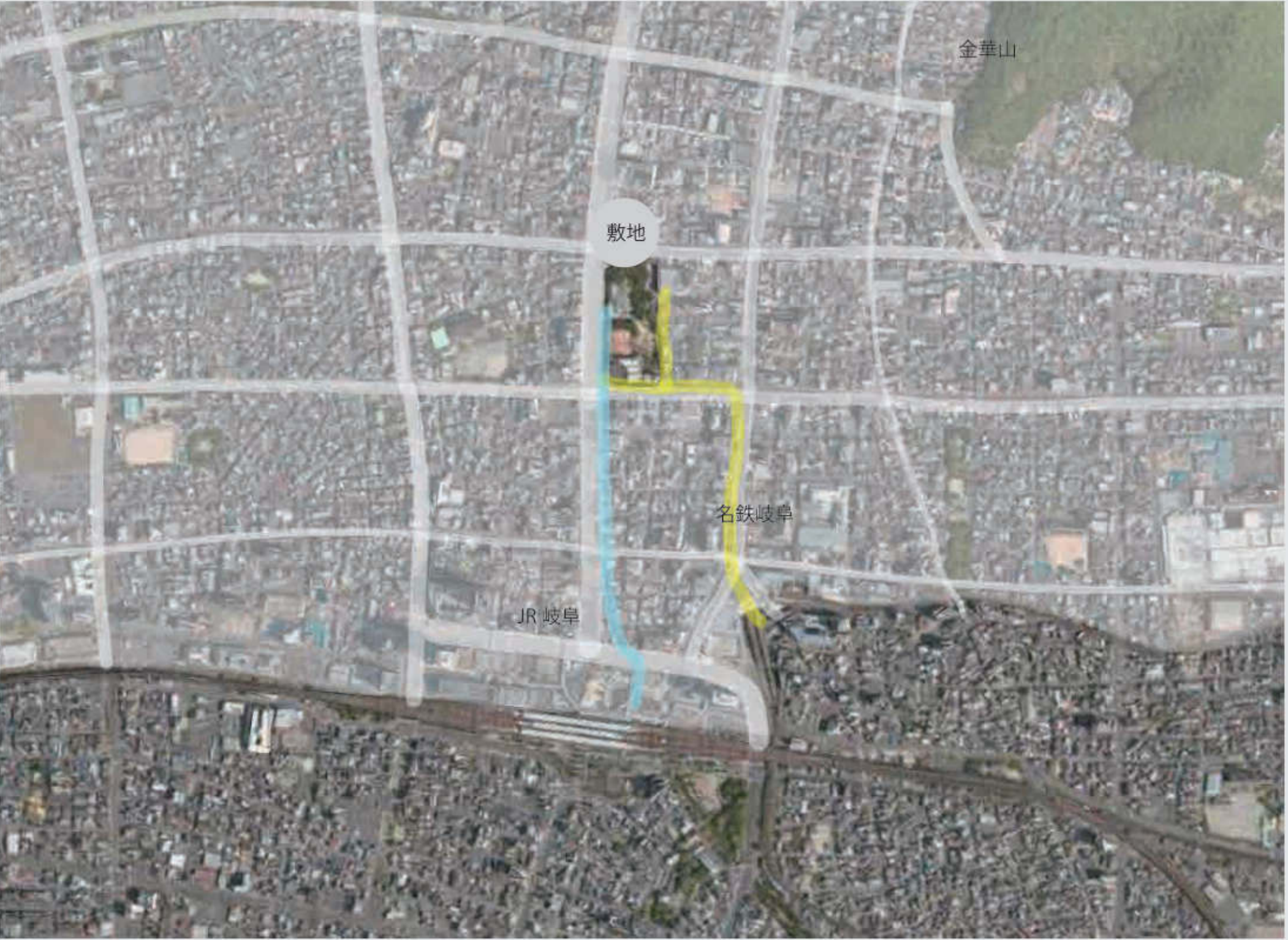
4-1. 金公園の空間構成と利用状況
金公園は柳ヶ瀬商店街に隣接する都市公園で、日常的な利用からイベント時のにぎわいまで、幅広い使われ方が見られる場所である。園内は一様な平面ではなく、小高い空間・芝生広場・水景・デッキなど、複数のレベルと居場所が点在する構成となっている。芝生広場には、「斜面滑り」や「フレイキューブ」といった、使い方が固定されない遊具が設置されており、子どもたちが身体を使いながら自由に遊び方を発想している様子が見られた。これらの遊具は、単なる遊び場としてだけでなく、公園全体に動きとにぎわいを生み出す要素となっている。噴水とそれに隣接するウッドデッキは、季節によって滞在の仕方が変化する場所であり、夏場には水遊びや休憩の場として多くの人が集まる。地下駐車場から地上へとつながる螺旋階段は、公園内部への視覚的・動線的な導入として機能しており、上下階の動きを自然につないでいる。全体として金公園は、“日常の中で短時間でも利用される「動きのある場」”として機能しており、親子連れや散歩、待ち合わせなど、多様な行為が同時に重なり合っている。



4-2. 金神社と多目的広場の構成
金神社は、柳ヶ瀬の中心に位置する歴史ある神社で、現在も年配の参拝者を中心に日々の参拝や季節ごとの祭事が行われている。境内は都市の中にありながら、外部とは塙や配置によって区切られ、時間の流れが公園とは異なる「静」の空間が形成されている。神社に隣接する多目的広場には、ひな壇状のベンチやからくり時計が設置されており、行事の際には人が集まる一方、平常時は通過や短時間の滞在が中心となっている。ひな壇ベンチは視線の段差を生み、広場全体を見渡せる構成となっているが、積極的に滞在を促す仕掛けは限られている。金神社では、初詣や節分、例祭などの祭事が年間を通して行われており、特定の時期には人の集中が見られる。しかし、若い世代の利用は限定的で、日常的な行為と祈りの行為との間には距離がある印象を受けた。

2. 敷地

岐阜県は中部地方の内陸に位置し、名古屋都市圏との結びつきが強い地域である。県庁所在地である岐阜市は、長良川や金華山といった自然環境と、戦後に形成された市街地が重なり合う都市構造をもっている。名古屋から電車で約20分とアクセス性が高く、通勤・通学圏としても機能する一方、中心市街地では商業やにぎわいの低下といった課題も抱えている。柳ヶ瀬は岐阜市中心部に位置する、かつて県内随一の繁華街として発展してきたエリアである。戦後は映画館や商店街を中心にしたにぎわいを形成してきたが、近年は郊外化やライフスタイルの変化により、人の流れが減少している。一方で、サンデービルディングマーケットなどの定期的なイベントやリノベーションの動きにより、再び人の活動が点的に生まれつつある地域でもある。



◎名鉄岐阜駅・JR岐阜駅からのアクセス
岐阜市の中心駅である名鉄岐阜駅とJR岐阜駅から、柳ヶ瀬エリアまではどちらも徒歩圏内・名鉄岐阜駅から柳ヶ瀬商店街：徒歩約15分程度で行ける距離
・JR岐阜駅から柳ヶ瀬商店街：徒歩約15分程度

バスを使う場合は、岐阜バスの「柳ヶ瀬」停留所や「文化センター金神社前」などで降車すると、より商店街エリアや金神社・金公園に近い位置で下車できる。

◎柳ヶ瀬（やながせ）商店街とは
柳ヶ瀬商店街は岐阜市中心部を代表する繁華街で、駅から北へ伸びる通り沿いに形成された歴史ある商店街です。かつては全国的にも有名な繁華街として賑わいを見せていましたが、近年は郊外型商業への移行や人口変化により人の流れが変わる中でも、地元イベントやショップの工夫によって地域のにぎわいを再生しようとする活動が続いています。☑

この商店街は1900～2000年代にかけて繊維産業と結びついた商業の中心地として機能し、昭和時代の生活や文化を今に伝える街並みが残っている。また、サンデービルディングマーケットなどの月例イベントやクラフト市が開催されるなど、若い層や観光客の来訪機会を生み出す工夫も見られる。

◎金公園（こがねこうえん）は柳ヶ瀬商店街のすぐそばに広がる都市型公園で、地元住民や訪問者にとっての休憩・憩いの場である。
・公園の位置：岐阜市金町5丁目付近で、柳ヶ瀬と金神社の間に位置する。
・面積：約1ヘクタール の広がり、緑の広場・芝生・水景施設などが整備されている。
・施設：噴水や芝生広場、ベンチや多目的スペース、イベントスペースなどがあり、買い物の途中にちょっと立ち寄れる休憩空間として利用される。
・利用：フリーマーケットや季節イベントが開催されることもあり、子ども連れや散歩途中の休息、友人との集いにも適した場所

公園の位置は、金神社や岐阜市文化センターにも近く、周辺の歩行者動線と都市機能をつなぐ役割を果たしている。

◎金神社（こがねじんじゃ）は岐阜市中心部にある由緒ある神社で、“金運招福”や商売繁盛のご利益を求める人々の信仰を集めている。
・住所：岐阜市金町5-3。JR・名鉄岐阜駅から徒歩約10～15分でアクセス可能である。
・由緒：伝承によれば西暦135年に建立されたとされ、長い歴史をもつ古社である。
・主祭神：淳熈斗姫命（ぬのしひめのみこと）が祀られており、家内安全・商売繁盛・金運の御神徳があるとされている。
・景観：境内入口には金色の大鳥居があり、その独特の存在感から訪問者に印象的な視覚体験を与えている。

神社は周囲の都市空間の中にあり、他の大規模な寺社のような広大な敷地ではないものの、柳ヶ瀬や金公園との近さから都市の中の祈りの場として機能している。

6. 提案目的

本提案は、金公園と金神社の間に存在する「日常」と「祈り」の断絶を、建築によって緩やかにつなぎ直すことを目的とする。

都市の中で人や出来事が川のように流れる中、立ち止まり、座り、想いを託す といった小さな行為が連続して生まれることで、 日常の延長として祈りに触れられる空間を構築する。

金公園のにぎわいから金神社の静けさへと移ろう体験の中で、「変わり続ける都市の時間」と「変わらず受け継がれる祈りの記憶」が共存する場を目

7. コンセプト

「川のように人や出来事が流れる都市の中で、それぞれの場所がもつ時間と記憶を建築によって静かに結ぶ」

- ・金公園＝「動」
- ・日常に人が集まる“開かれた場”
- ・金神社＝「静」

節目に願いを託す“祈りの場”

→この間を“半屋外の建築”でつなぎ、「ひと息」から「ひと祈り」へ移ろう体験をデザインする。

- ・変わるもの：季節、イベント、人の営み
- ・変わらないもの：祈り、記憶、神社の文化

この二つを結ぶ都市の“新しい参道”をつくる

建築の意味づけ

- ・柱＝季節の装置→祈りの器→都市と神社の橋渡し
- ・高さ・太さの変化＝動→静のグラデーション
- ・材質＝神社の文化を踏まえた必然性

この建築によって、公園の日常と神社の祈りが分断されずに繋がり、立ち止まる理由のある“新しい都市の余白”が生まれる。季節や行事と連動した空間は人の滞在を誘い、

8. 提案・計画

本来の公園と神社、そしてその間

本来、公園とは都市の中で人が日常的に立ち寄り、身体を休め、他者と緩やかに関係を持つための場所である。散歩や遊び、会話といった特別な目的をもたない行為を受け止めることで、都市生活の中に「ひと息」をもたらしてきた。金公園においても、子どもが遊び、親が見守り、犬の散歩や短い滞在が繰り返されるなど、日常の時間が積層する場として機能している。

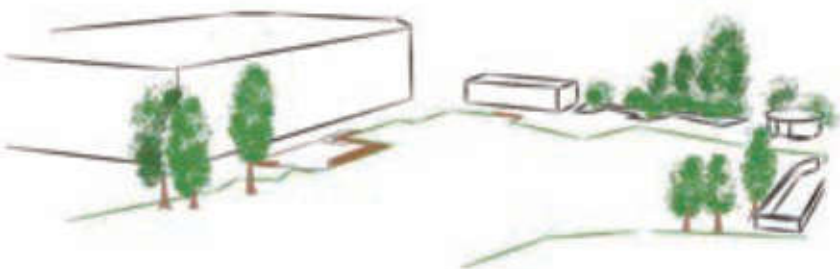
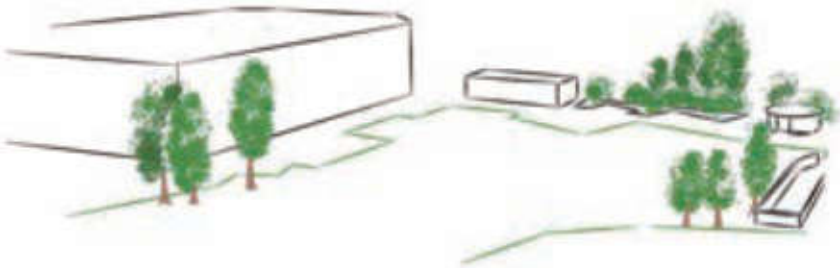
しかしその一方で、公園は行為が分散しやすく、滞在が一過性になりやすい側面ももつ。日常的に使われながらも、時間や記憶が蓄積されにくく、都市の流れの中で通過点として消費されてしまう状況も見られる。

本敷地は当初、明確な建築の意図をもたない、平坦で余白の多い公園空間として存在していた。人々は散歩や通過、短時間の滞在といった日常的な行為を行うものの、空間としての輪郭は曖昧であり、時間や記憶が積層されにくい状態であった。

その後、遊具やベンチ、芝生広場の整備といった改修が行われ、公園は「遊ぶ」「休む」といった行為を受け止める場へと少しずつ更新されてきた。特に小高い空間や子どもの遊び場の導入により、単なる通過点ではなく、日常の中で立ち止まる居場所としての性質が強まりつつある。

本卒業研究では、こうした公園の変化を一過性の更新として終わらせるのではなく、その流れを受け継ぎ、さらに厚みのある空間へと発展させることを目指した。新たな建築は、公園のスケールや周囲の樹木と調和する木質構造とし、風景の一部として溶け込むよう計画している。

また、公園側に対して大きく開いた構成をとることで、建築の内外を明確に分けるのではなく、日常の行為が自然ににじみ出す半屋外的な場を形成



神社は個人や地域の願いを受け止め、時間を超えて記憶を継承するための場所である。参拝や祭事といった行為を通して、人々は節目ごとに立ち止まり、自身やまちの在り方を見つめ直してきた。金神社もまた、商売繁盛や家内安全を願う祈りの場として、長く地域の精神的な拠り所となっている。

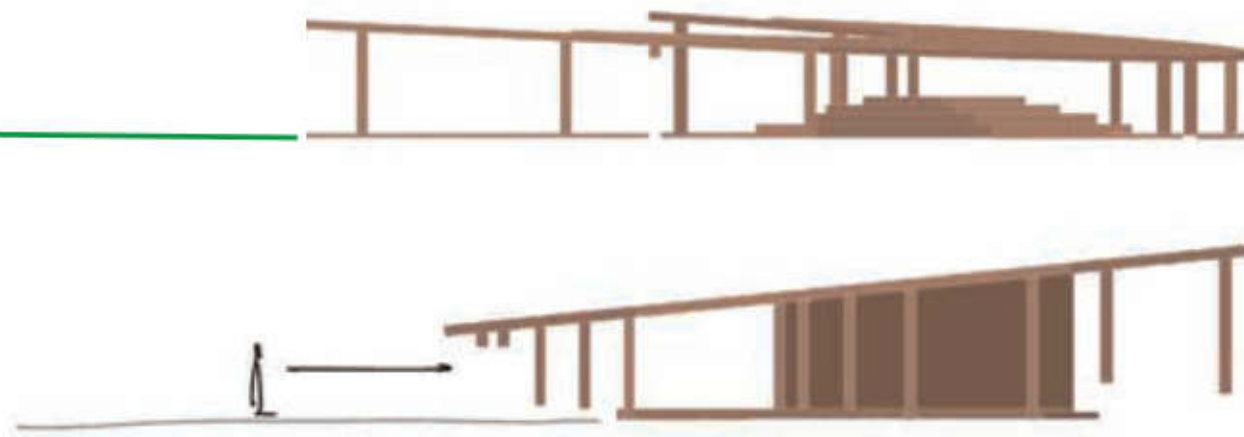
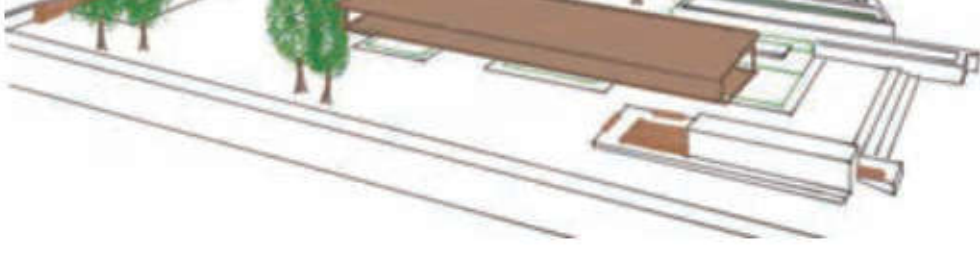
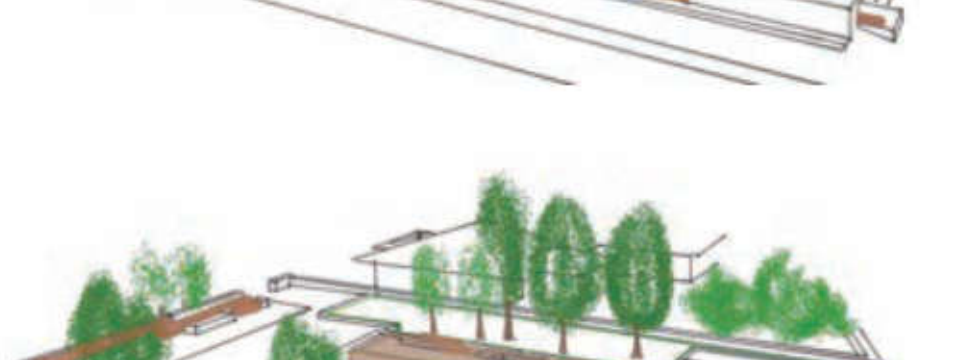
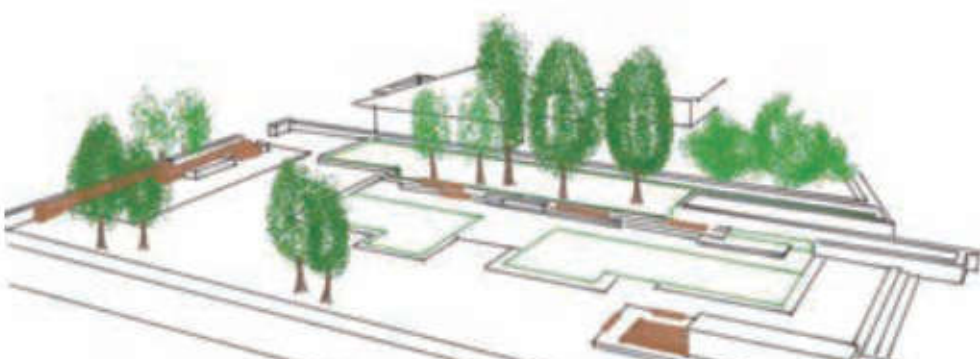
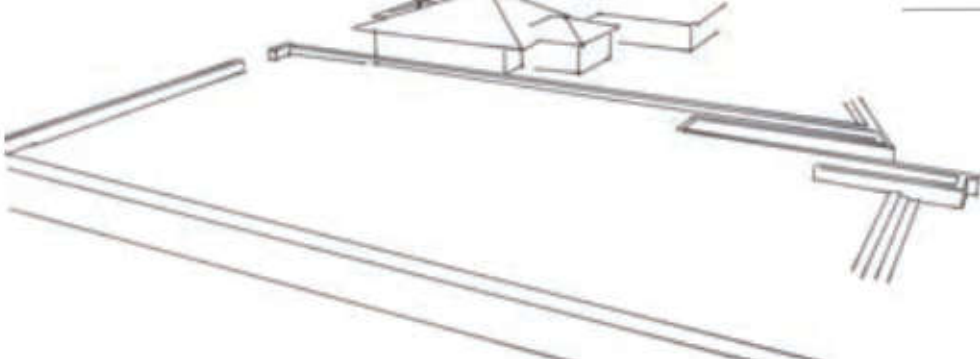
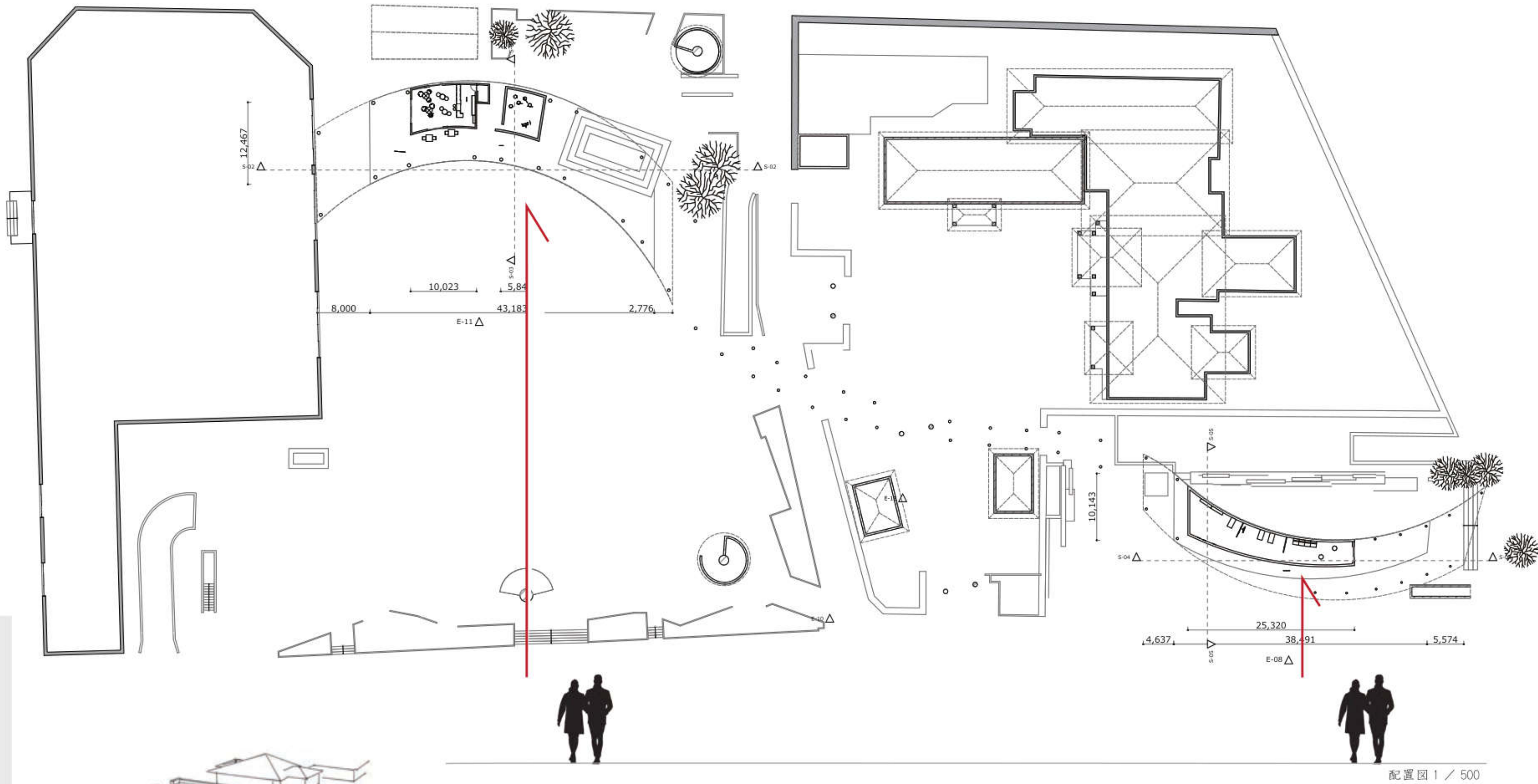
一方で現代において祈りは、初詣や祭事など特定の機会に限定される非日常的な行為となり、日常生活から距離を置かれるようになっている。神社は都市の中に存在しながらも、日常の動線や行為から切り離された「静」の場所として位置づけられがちである。

金神社側の敷地は、かつては参拝や通過を主とする、機能的で簡潔な外部空間として存在していた。境内と道路は近接しているものの、その関係性は視覚的・空間的に整理されておらず、都市の動線と祈りの場とのあいだには明確な切り替えが存在していた。

その後、ひな壇ベンチの設置や芝生の整備などが行われ、境内には「立ち止まる」「腰掛ける」といった行為が徐々に受け入れられるようになった。これにより、神社は単なる通過点や参拝の場にとどまらず、滞在を伴う空間へと変化し始めている。

本卒業研究では、こうした変化を手がかりに、神社と都市のあいだに存在する断絶を建築によって再編集することを試みた。提案する建築は、公園側とは対照的に、神社の象徴性や参道の体験を意識した構成とし、道路側では屋根を低く抑え、神社へ向かうにつれて徐々に高さが増していく斜めの屋根を採用している。

建物内部を通過する過程で、視線は次第に上方へと導かれ、抜けた瞬間に神社の存在が強く立ち現れる構成と



◎屋根の向きによる〈公園側／神社側〉の対比的な構え

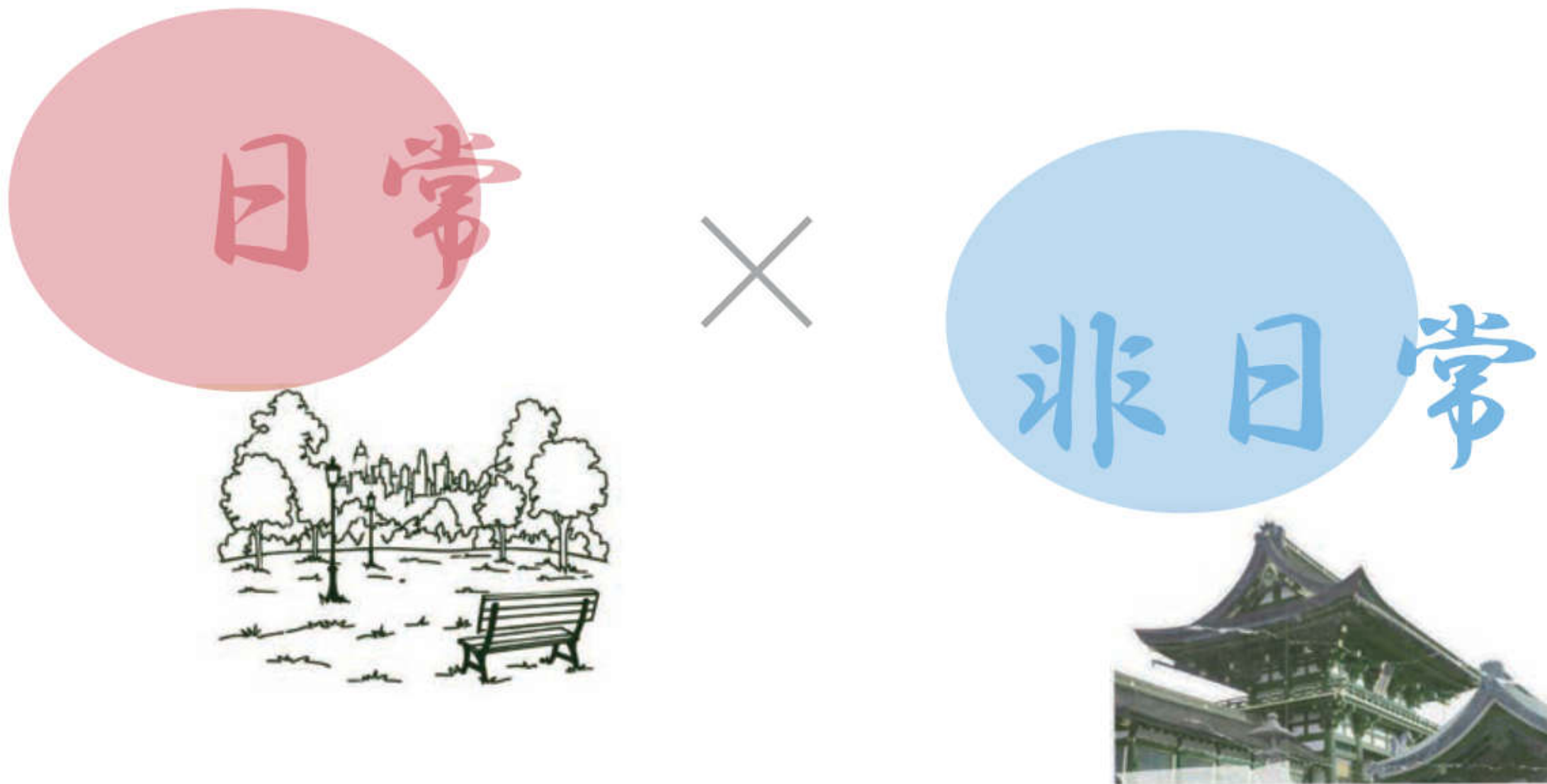
公園側の建築は、道路から距離があり、奥行きをもって敷地が認識される位置関係にある。そのため屋根は、公園の奥から見たときに内部の活動が想像できるよう、斜めに開いた形とし、「何をしている場所なのか」「中ではどんな時間が流れているのか」という興味を自然に喚起する構えとした。

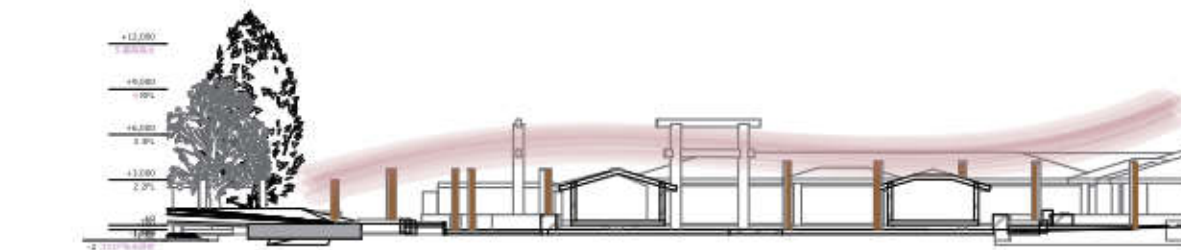
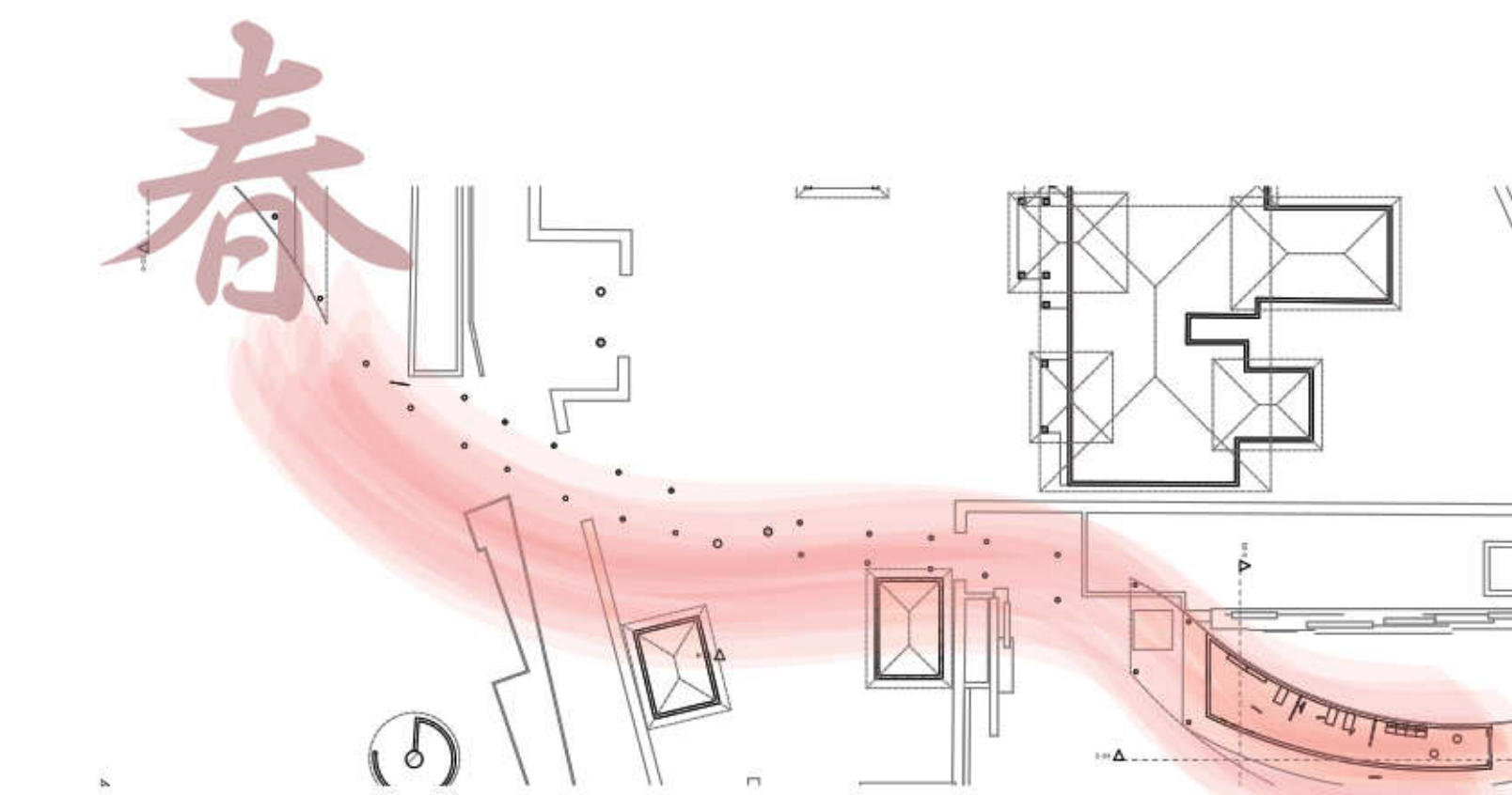
開かれた屋根の傾きは、公園の日常的なにぎわいを受け止め、建築が公園の一部として振る舞うことを意図している。

一方、神社側の建築は、道路に近く、通行者の視線を強く受ける立地条件にある。そこで屋根は公園側とは逆に傾け、あえて閉ざされた印象を与える形とした。

内部の様子を直接見せないことで、「中には何があるのだろう」という意識を生み、建築をぐり抜けた先に神社が現れる構成とすることで、

日常の延長線上に、意識の切り替わる瞬間をつくり出している。



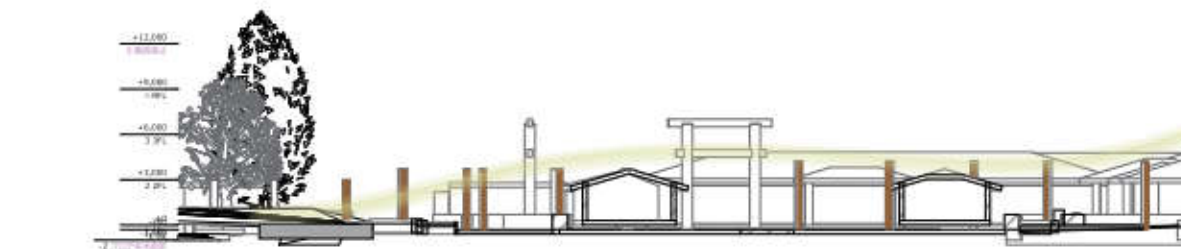


春 | ひらかれる気配、重なりはじめる日常と祈り

春は、公園に人の気配が戻り、神社にも行事や節目の参拝が増える季節である。芝生やベンチでは、散歩や子どもの遊び、立ち話といった日常の営みが自然と生まれ、空間は少しずつ外へとひらいていく。一方で神社では、年度の始まりや節句などを通して、地域にとっての「区切り」が静かに共有される。

本提案では、そのあいだに半屋外の建築を挿入することで、公園での何気ない滞在が、意識せずとも神社の存在へとにじみ出していく関係をつくる。春のやわらかな空気の中で、祈りと日常はまだ明確に分かれたものではなく、互いの気配を感じ合いながら、ゆるやかに重なりはじめる。

→ 風に揺れや布、花で彩り願い布を結ぶ「はじまりの祈りの季節」



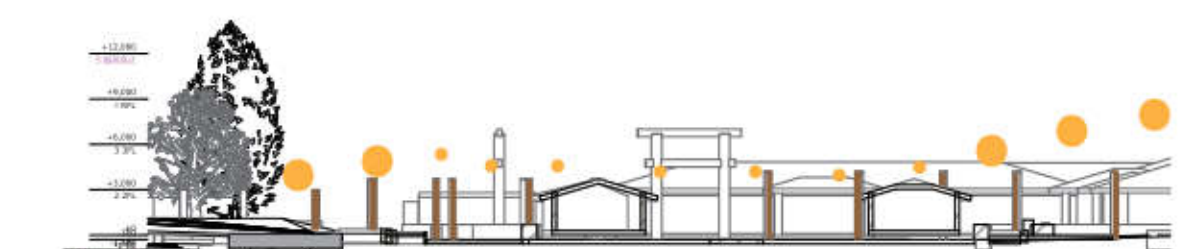
夏 | にぎわいの極点と、祈りが背景になる時間

夏は、公園がもっともにぎわいを見せる季節である。噴水や木陰、ウッドデッキには子どもや家族が集まり、マルシェやイベントなど非日常的な活動も増えていく。空間は「集まること」「外に出ること」によって強く活性化される。

一方、神社は強い日差しの中でも変わらずそこにあり、行事や祭礼を通して地域の記憶を支え続ける存在である。本提案の建築は、公園側に大きく開かれながらも、神社側へと視線や動線を進く構成をとることで、にぎわいの只中に「祈りの背景」を滲ませる。

夏の建築は、立ち止まるための場所であると同時に、賑わいを一段落ち着かせるための“余白”として機能する。

→ 日除けの布を張り、七夕や夜市など“涼”を感じる季節



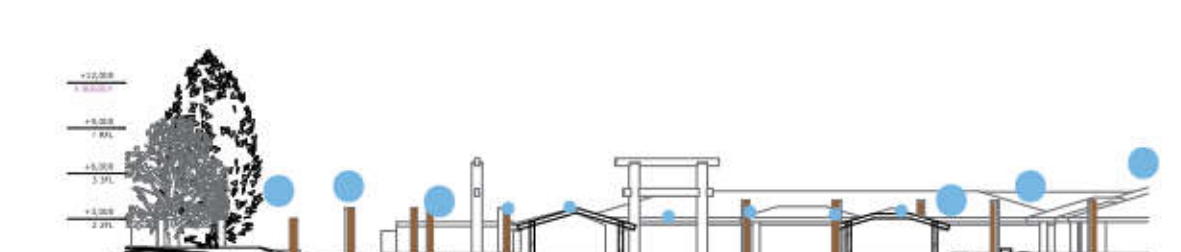
秋 | 立ち止まり、内側へ向かう時間

秋は、活動が少し落ち着き、空間に「滞るする質」が生まれる季節である。公園では、遊ぶよりも座る、歩くよりも眺めるといった行為が増え、人は時間をかけて場と向き合うようになる。神社でも、例大祭などの行事を通して、地域と信仰の関係があらためて可視化される。

建築はこの季節、通過点ではなく「考えるための場」として機能する。公園から神社へ向かう途中で立ち止まり、腰を下ろし、空間の奥にあるものを意識する。その体験を通して、祈りは特別な行為ではなく、日常の延長として受け取られる。

秋は、日常と非日常が最も近づく季節であり、建築がその距離を調整する役割を担う。

→ 落ち葉色のランタンで静かな“記憶の季節”



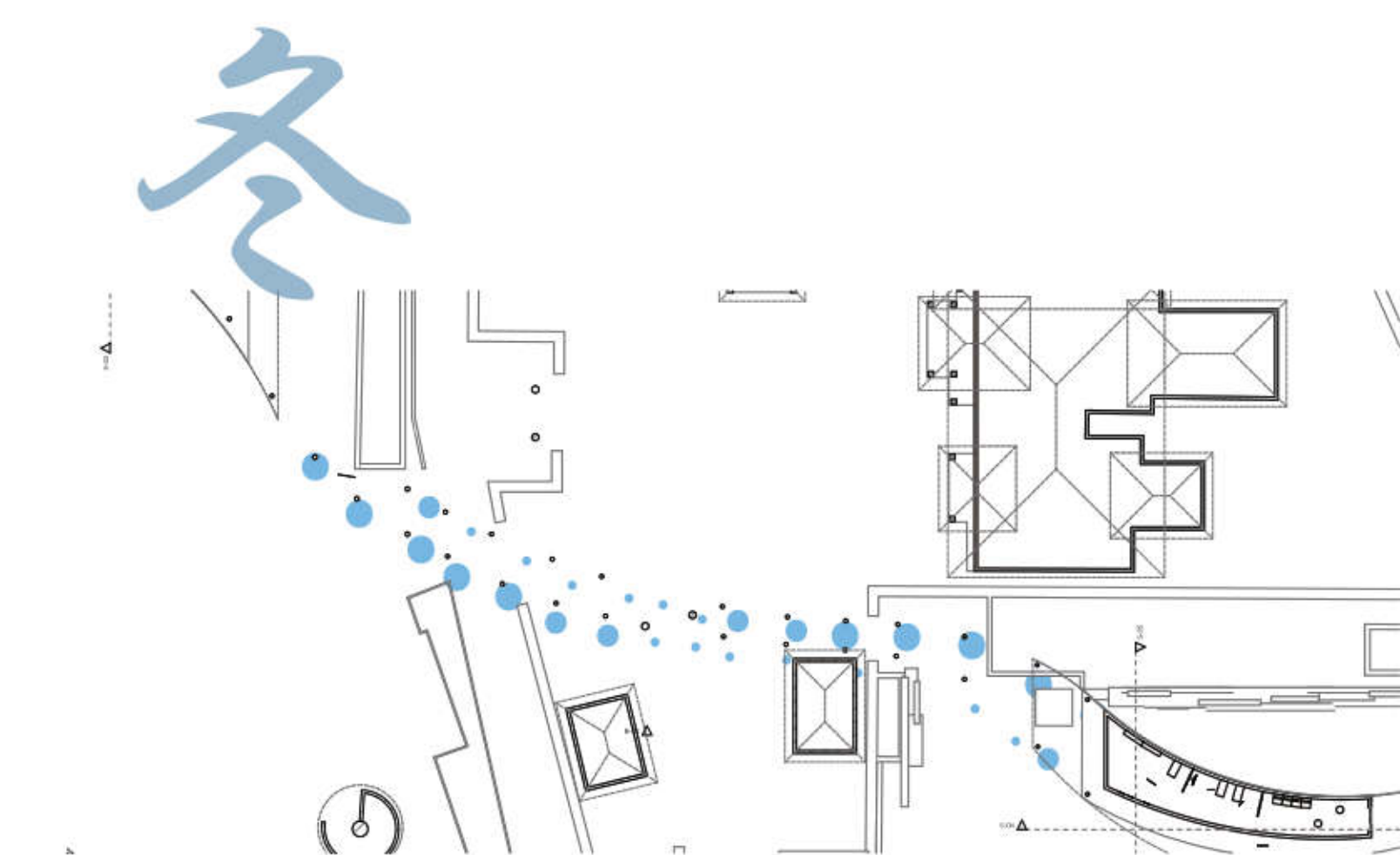
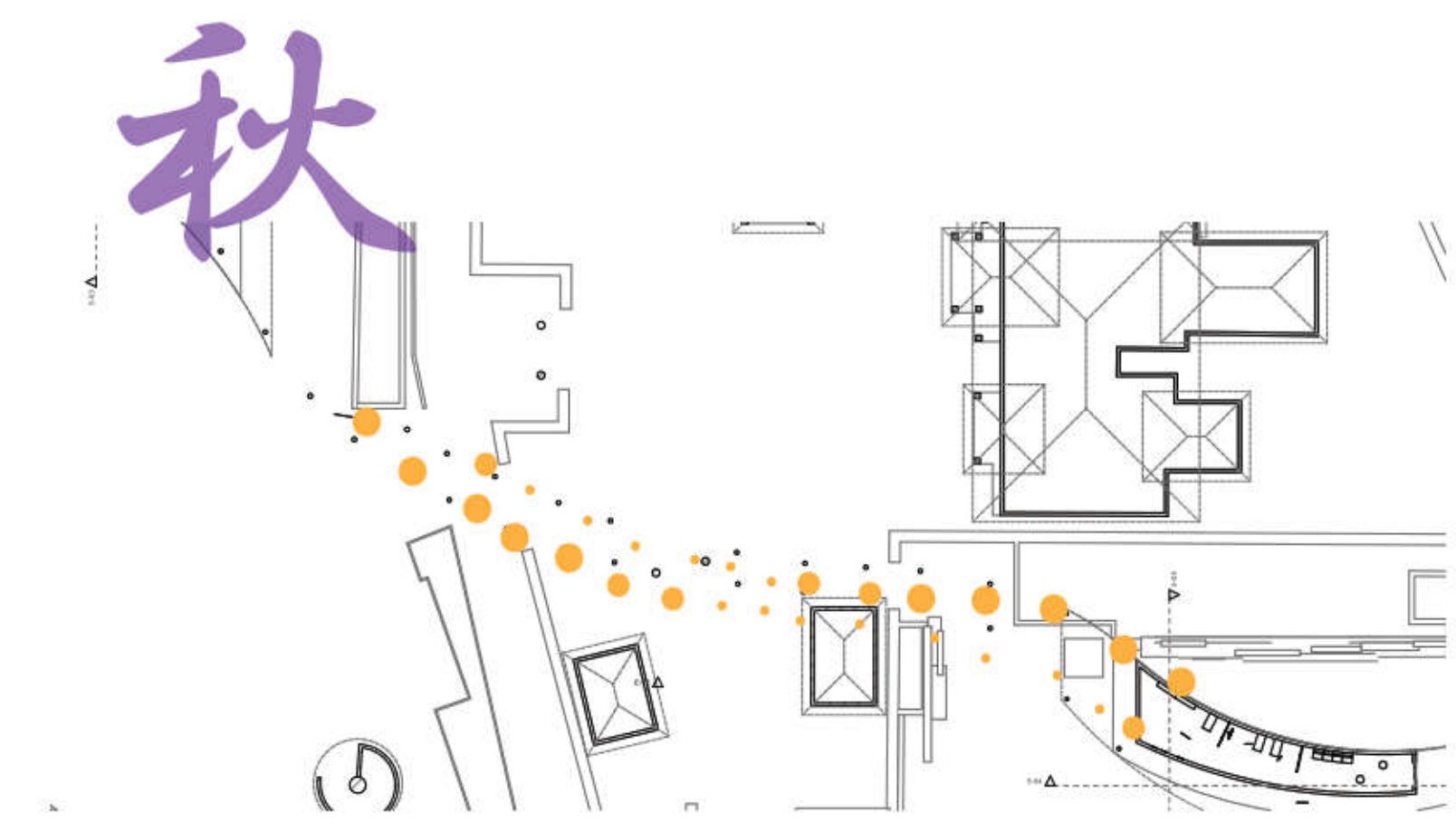
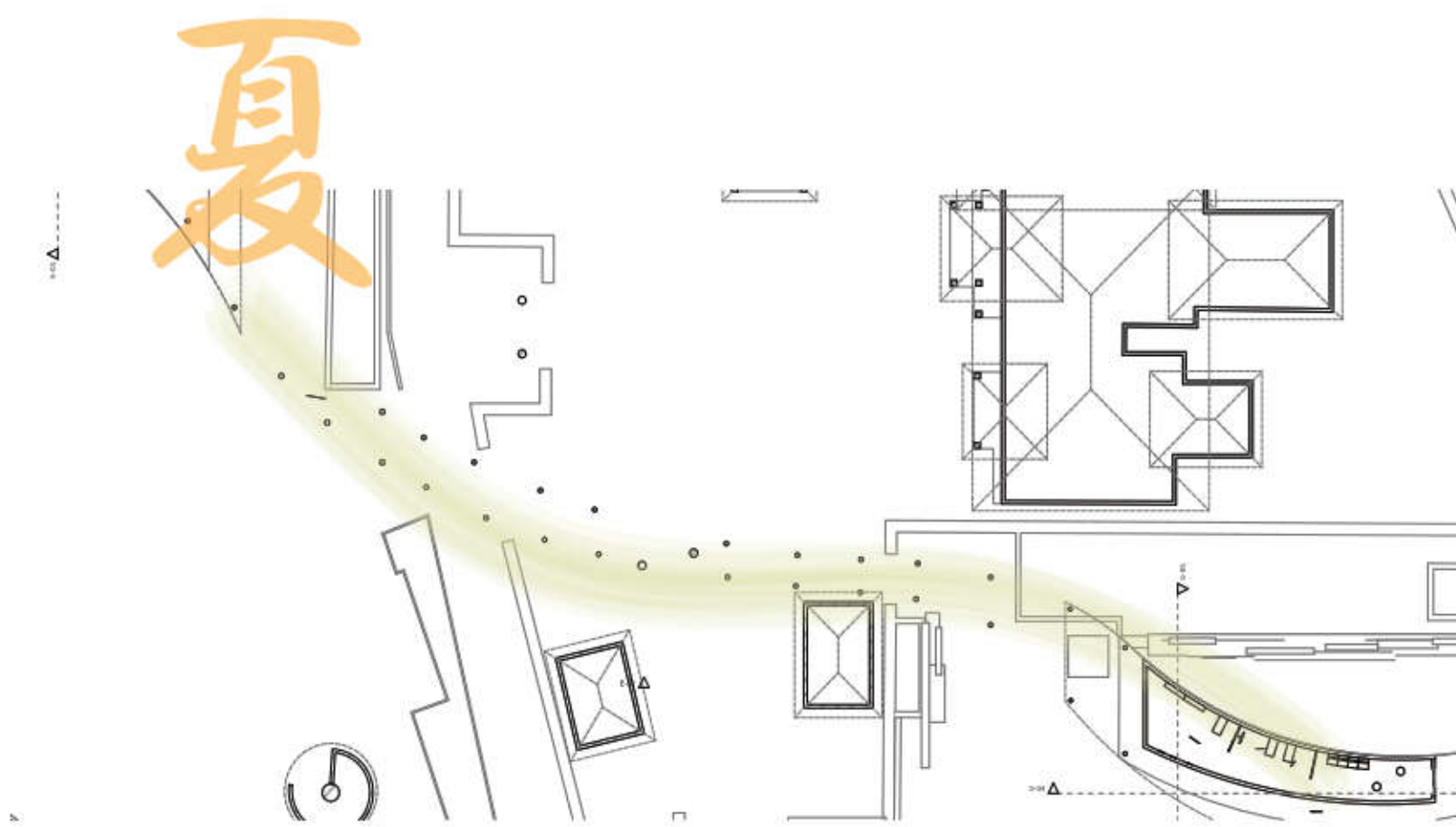
冬 | 静けさの中で現れる、連続した時間

冬は、人の動きが減り、空間そのものの性質が強く表れる季節である。公園は一時的に使われ方が限定され、神社では初詣など、明確な目的を持った行為が現れる。都市の中に、静と動のコントラストが生まれる。

本提案では、冬においても建築が閉じるのではなく、半屋外として存在し続けることで、人々が「通る・座る・見上げる」といった最小限の行為を選び取れる場を残す。祈りは点ではなく、季節を通して積み重なる時間として認識され、日常の延長線上に置かれる。

冬の静けさの中でこそ、公園と神社、そして建築がつくる連続した関係性が、最も純粋な形で現れる。

→ 光の帯が神社へ導く“祈りの季節”



- 役割
 - ・公園へ神社をつなぐ帯をつくり、流れの方向性を示す
 - ・季節イベントの装置
 - ・「動→静」へ導く空間のグラデーション
 - ・神社文化を継承する象徴性
- 柱の直径
 - φ 240mm/φ 300mm/φ 330mm
 - ・細い柱（公園側）：軽く、日常の象徴
 - ・太い柱（神社側）：重心を落とし、祈りの静けさへ
- ◎径の変化＝動→静の“心理的变化”を建築化

- 柱の高さ
 - ・開放的で高い（公園側）
 - ・密度が高く、高さは低い（神社側）
- ◎H2.5m → H4mへ連続的に変化
- 柱の材質
 - ヒノキを使用
 - ・神社と同じ構造材（文化的連続性）
 - ・香り、手触り（感性）

